

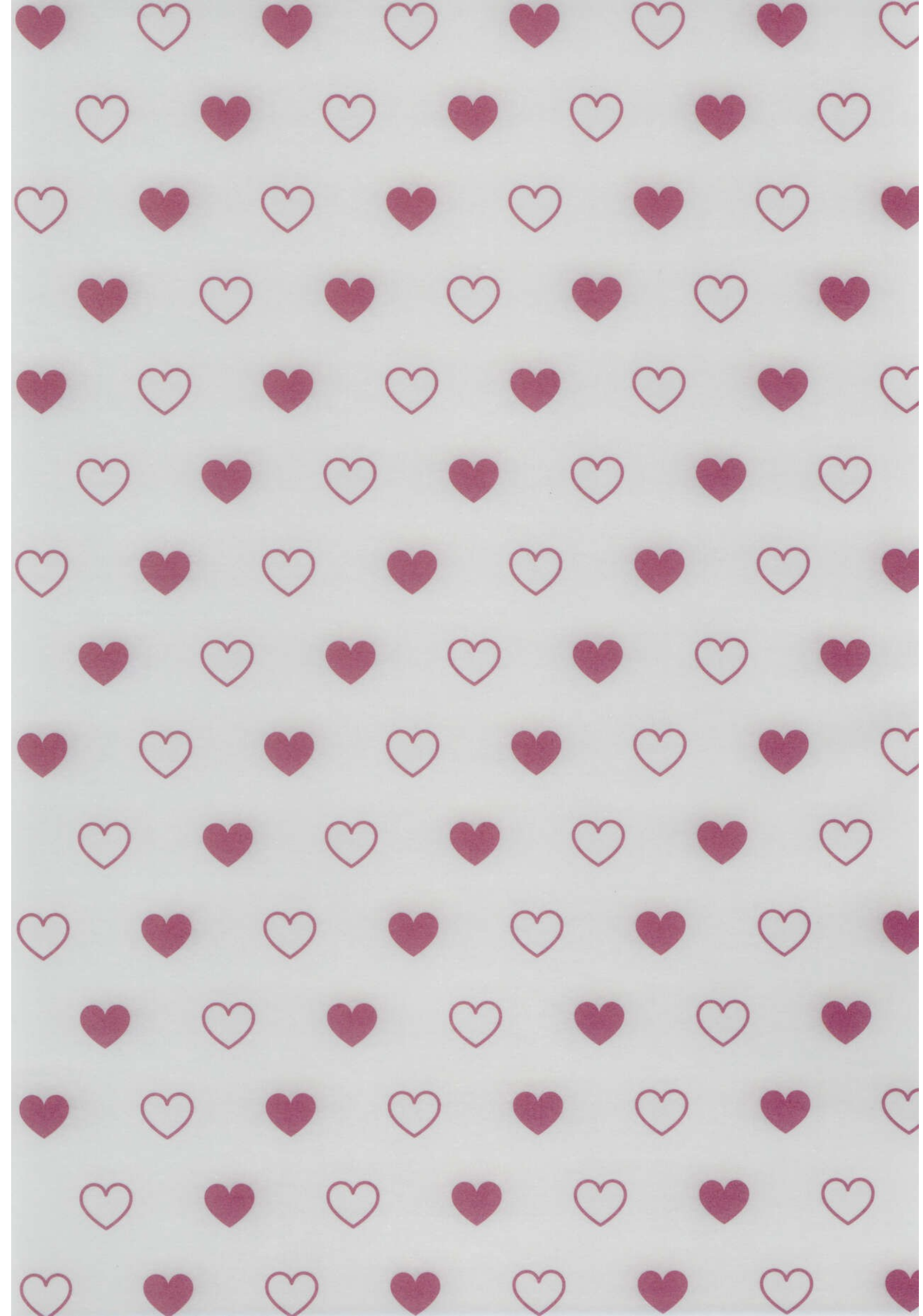
# 要介護LV.4

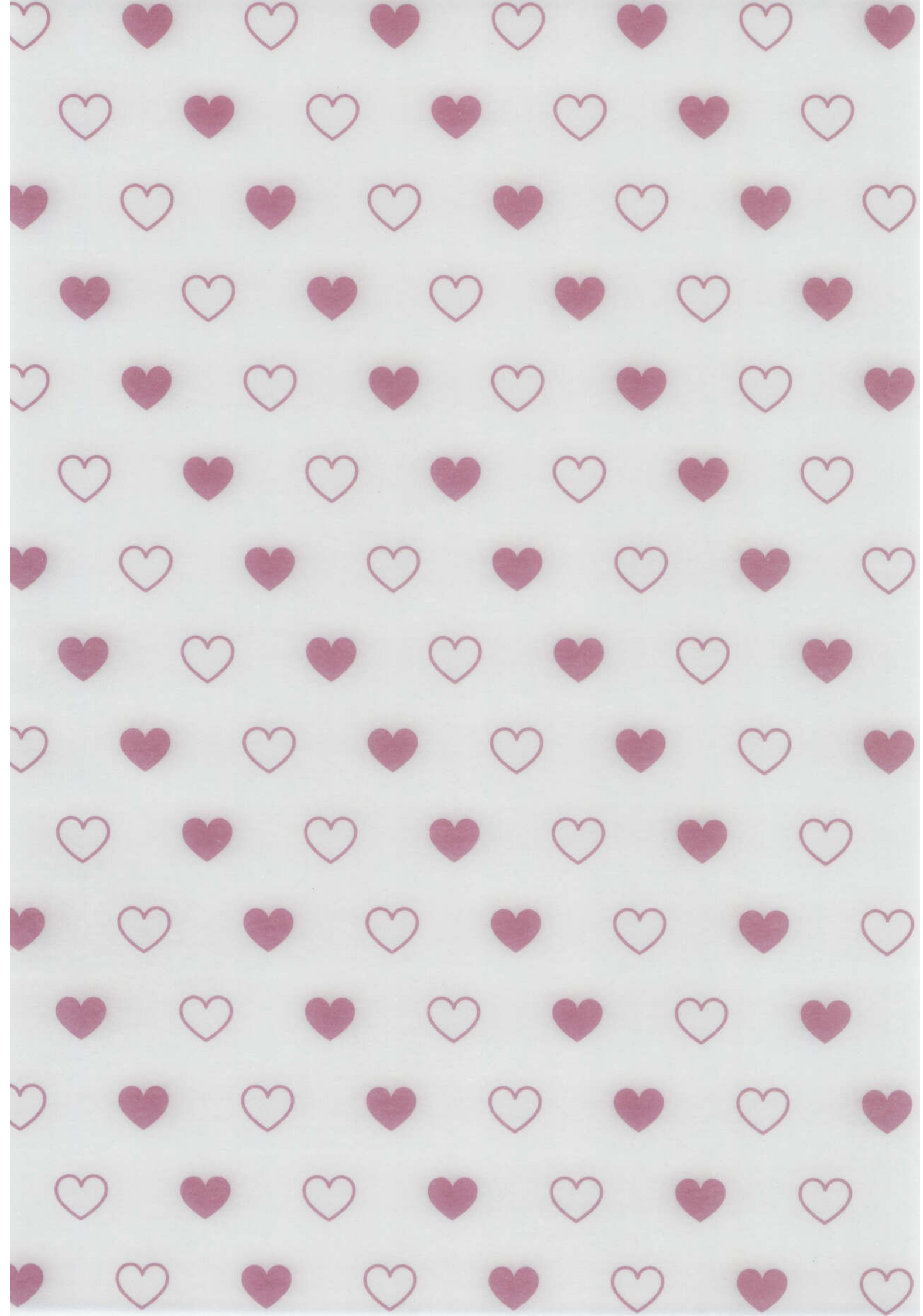


.....

**FOR ADULTS**







初めましてorこんにちは。

これは今度描こうと思っていたエルフ様とゴブリン爺さんのお話の絵本バージョンです。まんがを描く時間がどうしてもありませんでした。。。

また本文の固有名詞が、一今回初めて私の本をお手に取ってくださる方に対してかなり不親切かつ詰め込みすぎなところがあるので、以下あらかじめキャラクター紹介などしておきます。

このエルフファンタジーは冒険や続き物ではない読み切り型のファンタジーでこの世界の架空の惑星に住む様々なエルフ種や他生物の住人たちの生活や生き様をのんびり描いている作品です。

(「エルフ様」とはそのエルフファンタジーのなかでも最も描かれているキャラクターです)

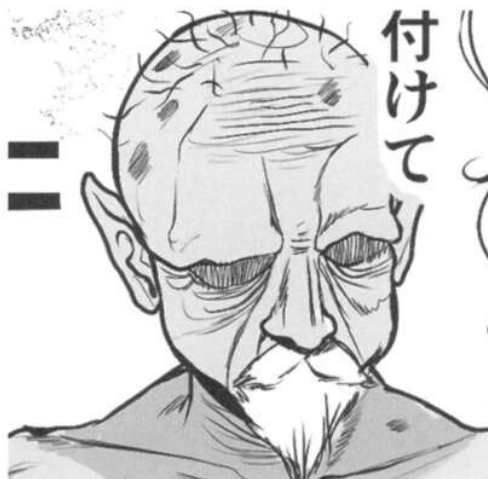


## エルフ様(670歳前後)

ハイエルフの女性でデメル州出身。普段は帝都王宮の植物学者の助手として勤務しています。

合理主義者的な側面のあるハイエルフにしては珍しく天真爛漫で感情優先で朗らかでちょっとテキトーなところが目立つ可愛い奥様。困っている人を見ると放って置けないようです。

昔触手さんに乳腺をいじられて、発情期中は母乳の分泌が止まらない身体に変えられてしまいました。



## ゴブリン農耕族の長老(500歳↑)

数あるゴブリン種の中でも農耕を営む部族の長として皆をまとめていました。

長年の経験上、エルフ種のことにはあまり信用していないようです。



## エルフ様の夫(700歳前後)

エルフ様の夫ですが、今回ほぼ出番がありません。漫画版では中盤まで出番を増やそうかと思っていましたが、

帝都王宮の暗号言語学研究室で働く学者で非常に理知的・論理的であり、暴走しがちなエルフ様をうまいこと宥めてあげられる人。

ゴブリンのことは大嫌いです。

ゴブリンには様々な種族が存在します。

海洋を渡る交易族、  
家畜と共に定住地を  
伴わない流浪族、

小動物の狩りを  
主とする狩猟族など  
多種に及びます。

かれらが種族同士で  
争うことは滅多にありません。  
あるとしても小競り合い  
程度のようなものです。

ここに居るかれらは  
種を育て刈り取る農耕族。

温暖で肥沃な土地で  
森に群れて住処を作り  
その日その日を  
のんびり生きていました。

集落が強襲されたのは  
そんな何でもない日の  
ことでした。

背丈が似ているにもかかわらず  
目は不気味に開き切り、  
鋭い歯と爪を持った  
——ゴブリンと似て  
非なる生物の集団に

家屋は破壊され、  
食料は奪われ、  
そして農耕族達は  
容赦なく殺害されました。

村落は地獄絵図と化しました。

奇しくも、その地獄より  
抜け出したゴブリンがいました。

農耕族の村長です。

しかし、手負の年離れた  
彼の心身は限界でした。

(なぜ若者が死んでいくそばで  
ワシだけ生き残って  
しまったんじゃ……)

——彼の意識は途切れました。

「わざわざ錬金素材の採取  
なんかに付き合ってくれて  
ありがとうね、騎士さん。  
退屈でしょう？」

「いえ主の奥様の護衛が  
拙者の務めでありませう。  
何なりとお申し付けください」

ある日の休日、エルフ様は  
錬金素材の採取のため  
裏山を散策していました。

本来なら一緒に出かける  
はずのかの女の夫は中期的な  
国外出張で不在のため、



かれが妻の護衛として  
召喚した魔界の騎士  
-通称・赤き侵略者-  
と行動を共にしていました。

「採取って楽しいはず  
なんだけどなあ  
毎日に刺激が無いわ」



一人ではないので  
孤独感こそないものの、  
夫がいないことによる  
寂しさを感じていたようです。

「そんな道中。」

「ぬ、奥様。手前に何かか…」

「え？……あら？何かしら…」



「ん……うーむ……」

何か柔らかくてフワフワしたものに包まれ心地よさを感じながら目覚めた先には

「あ、目が覚めたわ。大丈夫？」

農耕族の村長が目覚めた先には  
見目麗しいハイエルフの女性……

「(……てっ……天女??)」

「あなたこの山の中腹で  
行き倒れてたのよ。  
死んでるのかと思ったけど  
目が覚めてよかったわ」

「っお、おぬし……ハッ!  
村の民たちは……あだだッッ」

起きあがろうとすると  
体に痛みが走り、力が抜けて  
しまいました。

「ああ、あまり寝覚めに  
無理しちゃダメよ」

老人はエルフ様に、夜の出来事を  
記憶の限り話し尽くしました。

「……なるほどね。  
もしかしたら鋭齒族かもね」

「鋭齒族？お主何か知っているのか」

聞き慣れない名前に  
老人は顔を顰めました。

「ええ。すごく簡単に言うと、  
あなたたちの新種……かしら。」

「新種……」

「恐らく鋭齒族は今、あなたの村を  
新しい住処にしてるかも。  
今戻るのはかなり危険よ」

「……じゃが、村長としてワシは  
どうすればいいんじや……」

彼は頭を抱えました。

「とりあえず、  
ここに居続けても  
どうしようもないし  
私の家でしっかり寝ましょう。  
この山のすぐ麓にあるから  
そのあとに考えましょう。」

「破壊……あなた襲われたの？」

「じゃが、ワシの村落が  
破壊されているんじや!  
ここでもたついている  
暇は……あでっ」

「ねえ騎士さん、彼をおぶって  
もらってもいいかしら？」

「お安い御用であります!!」

「はえ??」

老人は鳩が豆鉄砲を食らった  
ような顔で、エルフ様の顔を  
まじまじとみました。

「(え、エルフがゴブリンの  
ワシを??……あ、ありえん……)」

呆気に取られながら  
老人は彼女の家へと  
運ばれたのでした。

老人はエルフ様の家はなれの小屋に泊めてもらいました。

「おじいちゃん！おはよう！体の調子はどう？」  
「朝ごはん作ったから食べて！」

「お！？お、おお……」

ふと天真爛漫な声が響いたかと  
思えば、料理で手が塞がった  
エルフ様が元氣よく入って来ました。

ハイエルフには珍しいと  
言えるほどの女は  
よく喋る女性です。

彼はここで、抱えていた疑問を  
かの女に問いました。

「……おぬしはエルフじゃ。  
エルフがワシらゴブリンを  
邪険に扱うことはあっても  
手助けするなど聞いたことがない。  
なぜおぬしはワシを介抱したのじゃ？」

「……村も村民も何もかも失った  
古い先短いワシを介抱して  
何になるといふんじゃ。  
ワシはもう楽になりたい……」

その時です。  
かの女の表情が怒気を含んだ  
ものに変化したのは。

「そりゃあ道端で  
行き倒れてる人を見たら  
放っておけないでしょう」

あっけらかんと答える  
エルフ様に、老人は  
面食らいました。

「何ばかなこと言ってるの!？」

「せっかく助かった命なのに  
そんなこと思ってたら  
死んだあなたの仲間に  
申し訳が立たないでしょう！」

「……たしかに今のあなた一人  
ではどうにもできない。」

でもね私、昨日ここに帰って  
きた後に国にこの出来事を  
ちゃんと通報したわ。」

「ぬ……それはどういう……」

「私たちも鋭齒族の凶暴性は  
知っているから、見つけ次第  
軍が討伐しているのよ。」

だから安心して。  
決して変な気を起こさないで。

あなたの村を襲った奴らも  
必ずその報いを受ける時が  
来るから。」

その日の夜。

「おじいちゃん、こんばんは！」

そこに居たのは寝巻を着て枕を抱いたエルフ様でした。

「おお……？一体何の用事じゃ？もう寝る時間じゃぞ」

「見てわかるでしょ？」

夫も出張でいなくて寂しいから来ちゃった。添い寝してあげるわね！」

「フア！？」

エルフ様は遠慮なく老人のベッドの空きスペースに寝転びました。

夫の不在で寂しさを感じていたのも事実ですが、

今の長老には希死念慮がないと言えば嘘になるため

彼が変な起こさないようにそばに居る必要があったのです。

「(つくづく変わった娘じゃ……)」

寝落ちして体制を崩したかの女の豊かで柔い乳房に顔を押しつぶされ

苦しさと共に役得？と安心感を感じながら、久々に深い眠りにつくことが出来ました。

……

「さあ！体を拭くわよ。ちよつと体を起こすわね。」

「むぐぐ…(乳房が当たる…)」

エルフ様は性格的にあまり丁寧で献身的な世話をするような女性ではありませんが、

粉らわすように毎日楽しい会話をするので傷心の老人の心は徐々に癒えてゆきました。

「おぬしは優しい娘よの。」

ワシはこれまでの人生でエルフといえど倒れたゴブリンを見ても踏まないように避けて歩くだけでー

介抱するような変わり者は見たことがなかった。

「それは多分私がデメルの子だからね」  
「??」

「デメルはこの国の一地方で南にある大きな島よ。」

そこはゴブリンさんの原産地で、ハイエルフと彼らは同じ屋根の下で生活することが普通の私の屋敷にも数人のゴブリンさん達がいたわ。」

「ぬ…そんな文化が…確かに思い出してみれば大昔、交易族の者にそのような国があると聞いた記憶がある。」

おぬしはまさにそのエルフだったのじゃな。」

「ええ。だから私は貴方達に親近感を持って接してる。」

でもそうじゃないエルフは貴方がイメーজするようにあなたたちや他の生き物に対してほぼ無関心ね。

関心があるとしたら生物学上の観点から…ぐらいかしら。」

「なるほどのう。この年になって世界の広さを知ろうとは…」

「お爺ちゃんいくつなの？」

「ワシは…もう数えとらんが500年は生きとるぞ。」  
「あら、ゴブリンさんとしてはもうかなりご高齢なのね。」

「そう言うおぬしはいくつじゃ？」

「674歳！」  
「ファ！？」

世界の広さに加えてエルフ種の寿命の長さにもたまげた長老なのでした。



穏やかな日々が過ぎていったある日の夜のこと。

「ん…うん…」

火照るような体の息苦しさに目が覚めたエルフ様は、己の股間に手を当てると

透明な液体がかの女の指に糸を引いてまとわりついていました。

「ああ…どうしよう。発情期がきちゃったわ…」

120歳あたりをこえたすべての女性のエルフ種に100歳になるまで10年に一度の周期で必ず訪れる発情期。

この状態に入ったエルフ種の女性は、いかに高名で勤勉な学者でも、百戦錬磨の戦士であつても――

一概に性の欲求で優れた思考が阻害されてしまうのです。

エルフ様もその例に漏れず。

「(どうしよう…夫がいない時に限って来ちゃうなん…自慰行為だけじゃおかしくなりそう…)」

部屋には激しい手つきで股間をまさぐる音が虚しく響き渡ります。

「(そ、そうだわ、騎士さんにお願ひして抱いてもr…)」

それは絶対ダメ!彼は夫にも私にも絶対的な忠誠心があるからその関係を崩すことになりかねないわ。

あ、くも、う…どうすればいいの…もう外に出て、出くわしたモンスターさんにいっぱい交尾してもらおうしか…」

「あ…っ!」

その時、ふとよこしまな考えがかの女の脳内をよぎったのです…。





ちゅうとうとう……

唇を根元で固定  
させながら、どくどくと  
出るものを吸い上げ……

っぽんツツ

いやらしい音を立てたと共に  
エルフ様の口がようやく  
おち○ちんから離れました。

「ん……っふぁ」

ゴクンと静かな部屋に  
かの女の鳴らした音が  
響き渡りました……

「おっ……おぬし……」  
「キヤツツツツ……!!?!」

「お、お爺ちゃん……起きてたの……  
ご、ごめんなさい……」  
エルフ様は顔を真っ赤にして  
半泣き状態で彼に謝り倒しました。  
「いやあの……、ビククリしての。  
何が寂しゅうて老人の寝込みを  
襲う必要があるのかと……」

「あ、あの……実はね。  
止むに止まれぬ  
事情があつて……」

エルフ様は観念し、  
発情期のことを明々白白に  
伝えました。

「……あの時、決して邪な気持ち  
を持ってあなたを助けたわけじゃ  
ないの……わかって。」

でも、今は本当に体が  
おち○ちんを欲しがって  
たまらないの。

このままだと本当におかしく  
なってしまうそう。」

「お……ほ……これが  
エルフの女子の……」

そういつて、かの女は寝巻を  
たくし上げ、己の愛液で  
濡れそぼった股間を老人に  
見せました。

「お、お爺ちゃんさえよければ……  
その、今日だけでいいから  
私のセックスの相手をして  
ほしいな……っておもうの。」

不眠なお願いでごめんなさい……  
明日以降はもう迷惑かけない  
から……」

「わ、わかった。わかった。おぬしの好きなようにしてくれ！」

「ほ、ほんとう？」

かの女の顔が紅潮しつつもパツと明るくなりました。

愛らしくもいやらしい音が部屋に響いたと同時におち○ちはエルフ様のお腹に根元までずっぷりと飲み込まれてしまいました。

「おおっ…ほおおっ…！」

「んっ…あ、あっ…ご、ごめんね…ちよっとイッちゃった…」

そのまま、かの女の腰がゆっくりと、そしてねっとり老体の上でくねりはじめます。

「ありがとう…お爺ちゃんは、何にもしなくていいからね。」

私が勝手に動くから…うんっ

ぬちゅんっ

「おほおおおっ…!?!」

「(おほおおおおおおっ…!?!?こ、これが…これがエルフのツツ…!)」

「んっ…」

なるべく激しくないから…きつかったら言っただけ…」

500余年もの人生で初めて味わう未知の感覚…」

「んぶうっ！」

「あんっ♡ごめんねっ♡  
苦しければ遠慮なく  
言ってねえっ♡♡♡」

口ではそんなことを言いつつ、  
かの女の腰使いはさらに  
ねっとりとした深みをも  
持たせていきます……

ハイエルフのかの女にとって  
ゴブリンのおち○ちんは  
それほど大きいものでは  
ありません。

しかし、発情し  
一刻も早く快楽を得たい  
エルフ様の肉体は限界を  
むかえていました。

かの女はその小さなおち○んを  
どうにか最大限に味わおうと、  
老体にしなだれかかり  
さらに深く恥骨を擦り付け  
抉るように腰を  
グラインドさせます。

「ああんっ♡♡これっ♡  
おち○ちん……♡♡  
小さいけど  
気持ちいいところに  
当たってイイっ……♡♡♡  
おじいちゃんっ♡♡♡  
気持ちいいよおっ♡♡♡」

柔らかく、それでいて程よい  
締め付け感のある膣肉は  
決しておち○ちんを離さず  
縦横無尽に彼を昇天に  
導くようでした。

真夜中の暗室に響く音は  
ぬちゅにゅちゅと  
ねっとり描かれる  
グラインドによるものからー

次第に激しいベッドの  
軋みと共に、ばんばんと  
粘液と互いの皮膚が  
ぶつかりあうものへと  
変化してゆきます。

(な・なんじゃこの  
気持ちよさはツツ…!?)

このままではあそこが  
肉ヒダに持って行かれて  
しまおうっっ♡♡♡

やがてかの女は  
抱擁するように  
老体にだきつきました。

「おほおおおぬしっっ♡  
そんなにされると  
ワシは本当に死んで  
しまおううううツツッ!」  
もはや長老を気遣う余裕などなく  
おち○ちんの射精だけを  
求めるその姿は  
完全に動物のメスのそれでした。

「お、おふっっ激しいっ♡  
ちよっとつまってくれツツ♡♡」

あまりのねっとりとした  
激しい刺激に、老人は  
目を白黒させあえぎました。

無理ありません…  
彼の体は歩けないほど  
弱っているのですから…

そんな老体に、熟れた女体が  
跨ってしまえば一体  
どうなるかなど…  
想像に難くはありません。

「おっおじいちゃんっっ♡  
ごめんねえっっ♡♡♡  
わ、たしいっ♡もうっ  
腰がツツ止まらない  
のおおおっっ♡♡♡」

この夜のかの女にはもはや  
理性は残っていませんでした。

老人は現実か空想かわからない  
意識の中でありながら、  
どんどんと股間に血液を集  
わせてゆきます。

「んんっっ♡  
おち○ちん死んじやいやっ  
逝くんじゃなくて  
イクのっっ♡♡♡」

あなたは私と一緒に  
イクんだからあつっ♡♡♡

「んはああああああ  
あああああつっつっつっつ」

「おほおほおほ  
おおおおおツツ  
♡♡♡」

それぞれの肉体が快樂の  
頂点に同時に達した時、  
二人は深く深く絶頂しました。

長老にとっては何十年  
いや、ひよっとすると  
一〇〇年以上久しぶりとなる  
セックスによる絶頂——

それも美しく熟れた  
ハイエルフによって  
もたらされた極限の  
快感によって

しばらくビクビクと  
その老体を痙攣させました。

しかし、発情期の  
エルフ様が一度や二度の  
絶頂などで満足など  
するはずもなく——

「はあっ…はあっ…  
お、じいちゃん、  
ごめんねえっ…」

私っ…まだ…  
まだ全然物足りないの…  
だから…もうちよっと  
付き合っ…えっ…

「おふっ…ちよ、  
お主ツツ少し休ませて  
くれ…おとおおおつっつ」

この夜、何十年と長い間  
睾丸に溜まっていた子種が  
空っぽになるまで…  
こっぴりとしぼられたのでした…



さて後日。

エルフ様は数百年前、触手さんにおっぱいの中を執拗に調教されたことで

発情期に母乳が止まらない体に変えられてしまいました。

「ほう…で、その母乳をワシに飲んで欲しいとな…」

「うん…私たちの体液ってあなたたちにとつてとても栄養価が高い飲み物なの。」

もしかしたらお爺ちゃん今より元気になるんじゃないかなって思うの。」

「おお…うまさそうな乳汁じゃ」

優しく乳頭を啄まれた途端、エルフ様の喉からこの上なく甘い吐息が漏れ出てしまいました。

「わ、わかった…どれ」「あっ…んっ♡」

乳房の大きさを一頻り両手で確認したあと母乳を吸おうと乳頭に口を付けました。

「あっ…あっ♡あっ♡♡♡♡すると…」

「あああんっっ…♡♡♡♡♡」

「シンン…！うまい。ほのかな甘みと脂肪のコクがたまらんわい！」

「ぬ…乳津が詰まって母乳が出てこんのう。どれ…」

そういうと、老人はかの女の乳頭を二本指で揉みしだくように入念にマッサージします。

黄色味を帯びた乳白色のミルクが勢いよく噴射されたのです。

「なんて柔らかかさじゃ。パン種をこねているようじゃ…」

始めたことで、長老は日に日に元気になりました。

飲めば飲むほど、体に若きエネルギーが生成されて行く感覚を覚えました。

そして、5日も経った頃にはまだ本調子ではないものの自力で膝をつき自主的に動けるまでに回復したのです。

「あっ♡ああんっ♡  
乳首ばかり何時間もっ♡  
おかしくなっ♡  
あああんっ♡♡♡」

「お主の乳汁…ほんに素晴らしいよの。まだ終わらんぞ。もっともっと分泌させて気持ち良くしてやるからの。」

長老は、これまで自分に親切にしてくれたお礼として

今度は自分がエルフ様を気持ち良くしてやろうと毎日の女に長く長い前戯を施してあげました。

特に乳頭への刺激は念入りにー。

触手に乳腺を改造されてから数百年間、発情期のたびに数え切れないほどの生物におっぱいを求められ続けた結果

かの女の乳頭は、性器の何倍もの感度になるまでに開発されてしまいました。

「ほれっほれっ♡  
3点同時責めじゃ♡  
何度でも気をやるのじゃぞ♡」

「あっっおじいちゃっっ♡  
もう、あっ、だめえっっ♡

老人は器用に乳頭を揉みしだきながら陰核を舐めまわし、かの女を責め立てました。

「あああああああああ  
ああああああああんっっ♡♡♡」

「ほっほ、これで337回目じゃ  
ほんにお主は敏感よのう♡  
「だ、だってええ…♡  
あああんっっ♡♡♡」

老人の熟練の手つきによってエルフ様は毎日 前戯だけで1000回近いオーガズムに達し、それはそれは深い満足感を得たのです。

日を追うごとに長老は、  
さらに元気を取り戻して  
ゆきます。

最初こそ自分のベッドで  
眠っていたエルフ様ですが、

次第に家にも戻らず  
小屋のベッドで、  
生まれたままの姿で  
老人と繋がったまま  
眠るようになりました。

かれはとうとう自力で  
立ち歩くことが可能になり

狭く小さい小屋の中で  
二人は昼夜問わず、  
お互いを何度も何度も  
求め合いました。

そして、セックスにおいても  
イニシアチブを取れるまでに  
なったのです。

襲撃され手負いとなる  
前よりも、さらに元気に  
若々しくなっていたのです。

「おじいちゃ、♡  
おじいちゃんっ♡  
あんっ♡そこっ♡  
♡♡♡」

「ほっほ、ここか、  
ここが良いかのうっ♡  
ほれっほれっ♡♡♡  
もっ♡と突いてやるぞい♡♡」

「あっ♡ああんっ♡♡」

ゴブリンである  
長老のおち○ちんは  
ポルチオにこそ届かない  
ものの、

Gスポットを  
ちようど良く刺激するため  
とめないオーガズムを  
かの女に与えることが可能です。

「本当につ…お主の乳汁は  
飲めば飲むほど元気が  
みなぎるわいっ♡」

「あんっ♡♡♡」



「あんなのジジイ…拙者の…拙者の主人の奥様に毎日毎日変態的な狼藉を働きおつてええええっ…!!」

「どうせゴブリンなんぞそれもあんな死に体役立たずの粗チンに決まっておろうがツツ…!!」

拙者なら…拙者のチンポなら奥様をもっともっと気持ち良くしてさしあげるの…!!

彼—魔族によって造られた赤き侵略者、こと騎士さん—のハラワタは煮えくりかえつておりました。

彼は昔、発情期の際に受けた術式により昏睡状態に陥ったエルフ様を夫の代わりに見守る任務を受けておりました

そのとき、彼は理性のタガが外れ、あろうことか召喚主であるかの女の夫を欺き

昏睡状態のかの女にそれはもう卑猥な悪戯を繰り返していたのです。

ああああ〜もどかしいツツ!!

し、しかし、奥様から頼まれない限りは拙者のかの女に触れることすらままならぬっ…

それ以上に 意識ある奥様と関係を持ったところで、主に顔向けができぬ…!!

えええ



「おじいちゃん、ほんとに元気になったよね。ここまで回復するなんて思わなかったわ。」



「ほっほ。それもこれもおぬしの看護とー。お主のおっぱいのお陰じゃー」

「やんっ♥♥♥もう♥♥♥さて…この辺でいいかしら」

二人は、騎士さんを護衛に付けて水辺にやってきました。



「歩けるようになったし…お爺ちゃんの体、今日は隅々まで綺麗にしてあげるね」

そういつてエルフ様はドレスを脱ぎ、とろみの付いた清浄液を自分の体に絞り出します。

「どれ、ワシが満遍なく塗りこんでやろう♥」

彼は清浄液をか女の女のおっぱい、肢体、そして股間の割れ目にもたっぷり塗りと塗りこんであげました。

「あんっ…おじいちゃん♥♥♥洗う側から興奮させないでっ…♥♥♥」

「ほっほ♥すまんのう♥」

「お爺ちゃん♡  
お痒いところは  
ないですかぁ♡♡♡」

「おっほ♡  
長いこと拭き洗浄だけ  
だったから全身が痒いわい♡  
隅から隅まで念入りに  
頼むぞい♡」

「はあい♡」

エルフ様はぬるぬるの体を  
たっぷり使い、長老の体を  
優しく包み込みながら  
おっぱいで、太腿で、  
全身でご奉仕しました！

かの女のほどよく脂肪の  
乗った肢体は、極上の  
快楽をもたらします。

「んっしょっ♡  
おじいちゃん。気持ちいい？」

「おおお、たまらん…」

「いつもおち○ちん  
お疲れ様♡♡♡  
今日はこもじゅくり  
洗ってあげるからね♡」

そういつて、かの女は  
老人にお尻を向ける形で  
またがり、そのぷっくりとした  
桃色の土手で、老いたペニスを  
ねっとり磨き上げて  
ゆきます。

「おおっほおおう♡♡  
それは…いい考えよのうっ♡」

肉付きの良い土手と  
クリトリスと陰唇が  
粘度を帯びた洗浄液と共に  
彼のいちもつに  
ねっとり絡みつき！

臆肉とはまた違う柔さで  
彼を昂らせました。

特にミルクの詰まった  
おっぱいでのご奉仕は  
まるでそれこそクリームに  
包まれている感覚を覚えます。

「そうだ…  
せっかく今おっぱいに  
ミルクが詰まっている  
状態だし…」

そういつてエルフ様は  
ブルンブルンと腰から上半身を  
左右に揺らし、勃起した  
おち○ちんを、  
ランダムに転がします。

「ほおうつ…乳頭のコリコリが  
気持ちいいのう…」

「でしよう？」

今日は特別に「もつと」  
気持ち良くしてあげる…」

「おふうつつ…！」

「えへ…これ夫にもあんまり  
したことがないんだけど、  
今日はおっぱいが大好きな  
お爺ちゃんにお礼…」

「おとおお、おふう…！」

むにゆうつつ…  
刺激にはもう慣れたつもり  
なんじゃがのう…」

かの女は自身のおっぱいを  
腕で抱き寄せ、  
円を描くようにグラインドさせ  
おっぱいの中のおち○ちんに  
緩急をつけながら圧を加えます。

「おほつつ…もうイキそうじゃ  
もっど！もっどきつく  
抱きしめてくれつつ…」

「んつつ…」

「っほおおおおおお  
おおおおおおうつつ…」

最も強い乳圧をかけられた時  
老人は腰をのけぞらせ  
あっけなく果ててしまいましたー





今回、時間がなく序盤が説明臭いこと・話が尻切れとなってしまう  
申し訳ありません。

漫画版を後日発行したいのです(ストーリーも全てプロットにて完結させている段階)  
が、あまり評判が良くないというか コミケであまり手応えがなかったので  
もしかしたらこの絵本版のみので完成とし、漫画版の発行は無いかもしれません。

この本の作業原稿を何度かsnsでアップしてきたはいいものの  
反応が 全くない……

こういった あまり評判の良くないものを漫画化させるよりは、現在考えている  
新作に注力した方が合理的な気がします。

なんせ描きたいものがあまりにも多いです。

今回のようにあまり時間がない場合にこのような絵本形式を採用するのですが  
漫画で描いた方が読者ウケが良いのはわかっているので  
今後は会場限定本でもない限りは たとえプレ版になってもとりあえず漫画という  
体裁をとって描いていかなければならないなと痛感しております。

たまになら良いのですが やりすぎるとそのうち読者を失うことになりかねません。

おそらく冬コミの本からはきちんと漫画になっていると思いますので  
もうしばしお付き合いいただけますと幸いです。

来年からは女性向け(男女CP)作品も発行していくために執筆を続けております。  
何を隠そう私はイケメンが好きだ(隠してないしバレてる)

よろしくお願い申し上げます。 貂

# Flieger

発行日:2023年 9月10日 第二版

<http://whitecross.sakura.ne.jp/>

eririn810@gmail.com

Twitter→@Flieger39207963

印刷: 関西美術印刷 御中

- ◆当書籍の未成年の購入および譲渡を禁ず
- ◆当書籍本文のインターネットへのアップロードおよびそれに準ずる行為を禁ず  
当サークルは2016年に発生した違法アップロード事件以降、当方の担当弁護士を通じて  
兵庫県警に被害届と告訴状を提出し、対応を進めております。  
当サークルは当該行為に非常に厳しい措置を講じておりますことをご理解ください。
- ◆ Uploading the contents of this book on the Internet is prohibited.  
I have submitted a damage report to the Hyogo Prefectural Police through  
my lawyer for an illegal sharing incident that occurred in 2016.  
I'm taking very strict measures against anyone who engages in this practice,  
both domestically and internationally.  
Thank you for your understanding.